



いずみ

No.67

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 37



《SPRING Wind II》

伊藤 隆弘

(2 ページに「作者の言葉」)

●特集 本田明二生誕 100 年

春の風をテーマに、植物的な有機曲線を組み合わせ、制作しました。柔らかな雰囲気の中にも、ピリッとした緊張感が漂い、観る角度によりいろんな表情を演出できたらという思いで制作しました。第73回全道展に出品した作品です。

(伊藤隆弘 全道展会員 長沼町在住)

タイトル: 《SPRING Wind II》

制作年 : 2018 年

素 材 : 大理石

サイズ : H59×W35×D32cm

設置場所: 作者所蔵

連載 宮の森の四季 37

本郷新記念札幌彫刻美術館

「虹と雪のバラード」

業務係 大場 裕子

雪まつりのあたりからだったと思います。

地下鉄駅構内から札幌冬季五輪のテーマ曲「虹と雪のバラード」が、到着時の着信音メロディーとして聞かれるようになりした。

メロディーだけなのですが、そのたびに「生まれかわる サッポロの地に きみの名を書く オリンピックと」の歌詞が私の頭の中で巡ります。

「虹の地平を 歩み出て 影たちが近づく 手を取りあって…」。

医師であり詩人、彫刻美術館の理事長も務められた河邨文一郎氏が手がけた歌詞です。

1971年には冬季五輪のシンボルとして、本郷新、佐藤忠良、山内壮夫、本田明二の作品がそれぞれ真駒内に設置され、市民にとって野外彫刻が身近なものとなりました。

2000年、本郷新の二男である俳優の本郷淳氏が亡くなり、札幌で偲ぶ会を行ったとき、親しい文化人や財界人が集まり、最後に「虹と雪のバラード」を全員でかみしめるように歌ったこともありました。

未来にかける夢と希望にあふれ、食、文化、ファッション、そして精神的にも開放されたあの時代を懐かしく思います。



北海道の美術家と冬

札幌文化芸術交流センター SCARTS

プログラムディレクター 吉崎 元章

「北海道的」とか「道産子らしさ」とかは、意識して形や色で表現できるものではなく、もし、その「的」とか「らしさ」というものがあるとすれば、長い冬の雪との闘いの中から育まれてくる、無形のものではないだろうか。＝本田明二「私の中の原風景」（北海道新聞、1985年12月4日）より＝

本田明二展が2018年11月から本郷新記念札幌彫刻美術館で開催されていましたが、27年前に札幌芸術の森美術館で開かれた回顧展を私が担当したこともあり、先日、「本田明二と札幌の文化芸術」と題して講演する機会をいただきました。最初に記した言葉は、その準備のために当時集めた資料を読み返していくなかで見つけたものであり、あのことろよりも増して強く心に響いてきました。本田明二展担当後も多くの札幌の美術家の展覧会などを手がけてくるなかで、いつも自問していたのは、北海道の美術の特徴とは何かということです。作家本人がどれほど意識しているかにかかわらず滲み出てくる、風土が育む感性と、この地ならではの表現の可能性と言ってもいいかも知れません。それに対して、素朴で野生味溢れる作風を築いた本田がそのひとつの答えを簡潔に述べていたことに、当時気付かなかった大切なものに久しぶりに再会した思いがしたのです。

本田明二を語るとき、彼が北海道に根を下ろした最初の、彫刻制作を生業とする「彫刻家」であるということを忘れてはならないでしょう。彼がシベリアから復員してきた時代には住環境や交通がいまほど整備されておらず、粘土が凍ってしまうほどの寒さに加え、材料や作品輸送

の経費などさまざまな面で彫刻には不向きな土地だったのです。そうしたなかで、東京に戻らず札幌に留まって制作を続けるのは並大抵のことではなかったはずです。そこには、同世代の画家小谷博貞が、中央画壇から遠く離れた地での活動を「冬眠」に例えながら、「きびしい風土の中で、自分をみつめ、人間の生と死を、自分の体温を保ちながら思考する時間」により熟成する精神の重要性を語った（小谷博貞「冬眠画家の寝言」＝北方ジャーナル1973年10月号）のに通じる信念を感じます。

一方、最近、北海道の美術家と冬について考えるもうひとつの機会がありました。今年2月に札幌文化芸術交流センター SCARTSで、冬のアートプロジェクトのアーカイブ展を行ったのです。冬期間に北海道内の屋外で行われた、アーティストがなんらかのかたちでかかわったものを調査してまとめたものですが、1950年にスタートした「さっぽろ雪まつり」から現在まで、30以上を確認することができました。「スノースケープモエレ」「ウィンターサーカス」「防風林アートプロジェクト」をはじめ、さまざまなアプローチで、寒さや雪など、この地の気候風土と向き合い、それらをかけがえのない資源として自らの表現との関連性を生みだそうとする試みの数々は、北海道で活動する意義を探求する連年のようにも思えました。

方法や現れ方のちがいはあるにせよ、冬という苛酷とも言える時期の存在が、北海道ならではの表現を生む大きな力になっていると改めて思う今日このごろです。

もうひとつの「終のすみか」

近藤 泉

(本田明二氏 長女)



本田明二の作品展を札幌彫刻美術館でやりませんか？—と声をかけていただいたのは、一昨年の師走でした。本田明二の没後30年、また、生誕100周年という年に開催するということで、一も二もなくお願いしますと言った事を覚えています。

展覧会の作品選定、関連事業、パンフレットの作成などを彫刻美術館でやっていただいたので、私はそれと並行して円山のアトリエの引っ越し作業に追われていました。

40年住み慣れた円山のアトリエと自宅。見たことのない父の作品やスケッチなどたくさん出てきて、展覧会にも並べることができました。そして出来上がったパンフレットに掲載されている父の文章を読み、もうひとつの「終のすみか」を思い出したのです。

本田明二のアトリエというと、円山西町のアトリエを思い出され、行った事があるという方が多いと思います。でも、父はあのアトリエでは10年ほどしか暮らしていません。それ以前は、東区的美香保公園にほど近い所に結婚と同時にアトリエを新築し、20年以上住んでいました。そこは、アトリエに住まいがくっついているというような木造の小さな家で、居間にはペチカが

ありましたが壊れて暖かなくなり、フローリングの床はうねっていました。私はそこで生まれ育ちました。

私の本郷先生の記憶は、小学校に入る前くらいからです。ときどき連れて行ってもらった春香山のアトリエの外観はすごくモダンでとても大きく、山の中腹で石狩湾を見下ろす素晴らしい場所だったのを覚えています。そして先生が来札の時は春香山のアトリエに泊まりますが、たまに夜のススキノに父と繰り出す前は必ずと言っていいほど我が家に立ち寄り、なぜか母が作った味噌汁や蒸かしたジャガイモに塩辛をのせておいしそうに食べるのを見て「うーん、このおじさんは何者なんだろう？」と幼い私は思っていました。

我が家のアトリエの中には、私の部屋として使っていた屋根裏部屋に行く階段がありました。ある日、先生と父が作品を見ながら話していたのを、階段を下りようと思っていた時見かけたのです。その時の父は普段見たことのない神妙な顔で、先生の言葉を聞いていました。なぜか、今でもその光景が一枚の写真のように思い出されます。そして、小さなアトリエの風景も目に浮かんでくるのです。

彫刻家・本田明二 代表作「けものを背負う男」シリーズ

1919 年（大正 8）11 月 25 日、札幌市生まれ。札幌二中（現札幌西高）卒後、彫刻家。43 年（昭和 18）文展初入選。太平洋戦争後シベリア抑留。48 年、復員して札幌在住。50 年、新制作展出品。本郷新、山内壮夫、佐藤忠良らと活躍。51 年、全道展会員。札幌彫刻美術館、札幌芸術の森美術館の設立に尽力。81 年、札幌市民芸術賞、86 年、北海道文化賞。野性的で力強い造形と大らかな情感が特色。89 年 4 月 22 日逝去。（札幌文庫 66「札幌人名事典」の項参照）



山内壮夫夫人とアトリエで

心の師 本田明二

渡会純价（版画家）

今日、私には恩人と言える人は 3 人おりますが、その第一に本田明二さんを挙げます。

本田さんには彫刻家の顔と、釣師の顔があります。釣師と言っても、海釣り、川釣りとさまざまありますが本田さんは全てをこなすオールマイティーな方でした。

私が全道美術協会の事務局長だった頃、「あまり顔色が良くないが外気に当たって釣りでもやらないか？」と誘われました。趣味ひとつなかったもので、これ幸いと思い、お供することになりました。釣りの経験のない私が突然アユ釣りに連れて行かれ、アユ釣りの一式を渡されて挑戦したところ、運よく釣果は本田さんと同等だったのを覚えています。それから病み付きになり本田さんの亡くなるまでお付き合いをしました。アユ釣りの解禁は 7、8 月しかなく、天候に左右されるが、シーズンには 3 日とあげず川へ通ったものです。私は運転をしないので常に師匠の本田さんの助手席。余市川、古平川、蘭越、黒松内と遠方まで同行しましたが、車中での会話が今にして思うと珠玉の時間でした。様々な芸術家の足跡を辿りながら創作の原点は何か？ 我々制作を生業とするものの生き方など四方山話を交え、豊富に語ってくれました。芸術家としての心得を学んだひと時でした。明二さんありがとうございました。

石彫アトリエで芥川龍之介「蜘蛛の糸」演出！

平岩博幸（元芸術の森建設担当）

先生は「札幌芸術の森」建設の各委員として多大な功績を残されました。多くの提案の中でも石彫刻アトリエの建設では東京芸大の石彫刻制作室まで調査。そして 1985 年（昭和 60 年）9 月 30 日、芸術の森第 1 期の工事完成の先駆けとして石彫刻アトリエが完成しました。先生はまるで子供が生まれたような喜びを隠しきれないようでした。

この時、完成祝いは関係者のみでささやかにと。ところが先生は持参したお神酒をうやうやしく、アトリエ制作室の、最初は真ん中に、次は東西南北の隅にまいて安全祈願。全員で本田風の祝詞に頭を下げて拝聴。制作室での宴が盛り上がるころ、突然先生がクレーンのチェーンを稼働させ、それに乗りました。そしてまるでターザンのような声を出し、側にいた竹岡和田男委員にも声をかけると同時に事務局にも「登れ」との合図。関係者のほとんどがチェーンにぶら下がるのです。それはまるで芥川龍之介の「蜘蛛の糸」のような光景。手を離すと、地獄に落ちるぞと脅かした演出。皆さん、必死になってチェーンをつかむその姿に石彫アトリエは笑いに包まれた楽しい至福の時間でした。

2019 年友の会新年会開催

トランペットの響きに新しい年の活動を誓う

友の会恒例の2019年新年会が1月26日、札幌・中央区旭ヶ丘の「OKUI MIGAKUギャラリー」で開かれ、来賓、会員など30人が集い、今年一年の活躍を誓い合った。

会場は昨年に引き続き、会の事務局長・奥井登代さんが将来を嘱望されながら早世した長男・理（みがく）さんのために開設したギャラリー。周囲の壁面に数々の遺作が並ぶ中、付近の小学校児童の作品も展示されるなどアットホームな雰囲気。



冒頭、橋本信夫会長が「北海道 150 年にまつわる歴史彫刻の選定をはじめ、彫刻清掃活動など今年も力いっぱい頑張ろう」と挨拶。続いてスピー



チに立った本郷新記念札幌彫刻美術館の寺嶋弘道館長が昨年、自身が遭遇した美術館での彫刻転倒事故の経緯などをユーモアを交えて語り、美術館での彫刻管理の課題などを述べた。さらに、橋本会長が友の会が昨年から取り組んでいる「道史関連彫刻 100 選」についてスライドを使って彫刻の所在地や分布状況などを紹介、数千点ある彫刻作品から歴史関連の作品絞り込みの作業などへの協力を呼びかけた。

このあと、高橋大作副会長が乾杯して会食に入り、参加者からのテーブルスピーチなどで歓談が盛り上がった。

引き続きミニコンサート「トランペットの響き」が開演。不慮の事故から右腕に障害を抱えながらコンサート活動をしている鈴木由紀さんがピアノの瀬野朋恵さんとのコンビで明るいトークを交えながら名曲の数々を演奏して会場に元気を振りまいた。

最後に二人の演奏で全員が「故郷」「花は咲く」を合唱して新年会の幕を閉じた。



彫刻美術館友の会 2019 年度総会開催

と き: 2019 年 4 月 28 日(日) 13:30 開会

ところ: わくわくホリデーホール(市民ホール)

特別講演 吉崎元章氏(札幌文化芸術交流センターSCARTS プログラムディレクター)

2019 ゆきあかり in 中島公園

山鼻小児童とコラボ

厳しい寒さの中、2月8日から10日まで札幌・中島公園で開かれた「ゆきあかり in 中島公園」に今年も参加、山鼻小学校児童らと共にキャンドルを灯して冬の公園を彩った。

初日の8日、山鼻小の3年生



90人が参加、友の会のメンバーと雪の壁に棚を作り、それぞれの願い事を書いた紙コップを置いた。期間中バケツに水を入れて凍らせたたくさんのキャンドルが飾られた。

「アフリカンアート展」

井尻さんがコレクションを披露

会員の井尻哲男さんが5月31日から6月2日まで3日間、所蔵のコレクションを披露する「アフリカンアート展」を札幌市中央区の古民家を利用した「ギャラリー鴨々堂」（中央区南7西2-2 ☎ 011-596-7929）で開催する。入場無料。

出品するのは井尻さんが所蔵するアフリカンアート約30点と関連資料20点。

アフリカンアートと言えば友の会の橋本信夫会長が芸術の森美術館に寄贈したものが知られているが、井尻さんも長くこれらアフリカの仮面などの収集を続けており、「橋本コレクションに負けない、多様な仮面、立像を紹介させて頂きます」と意気込んでい



る。井尻さんは「2017年4月、札幌彫刻美術館で開かれた『アフリカの仮面と彫像』企画展にも数点を公開しているが今回は質量ともそれを上回るもの。作品群の多くは、素朴なものだが、これ以外にも東京でもまず見ることができない書籍や動画も併せて紹介させて頂き、アフリカンアートの奥深さを理解できる展覧会にしたい」と準備に追われている。

札幌市文化局と懇談

「野外彫刻修復保全対策委」設置を要請

友の会と札幌市市民文化局文化部との意見交換会が1月29日行われた。毎年恒例で行われており、文化部側から前田文化部長、斎藤文化振興課長、堀井振興係長らが出席、友の会からは橋本会長、高橋副会長、奥井事務局長らが参加した。

会側から昨年の野外彫刻の

清掃、補修事業について報告した。また、今回は特に本郷新記念札幌彫刻美術館の屋外彫刻が経年劣化のために倒れ、点検中の職員が負傷する事故があったことから、従来から指摘している市内のブロンズ像の本体と台座を固定するボルトの腐食問題、コンクリート像のコンクリートが耐用年数をはるかに越え、経年劣化が激しくなっている点を指摘、市内の野外彫刻の全数緊急点検の実施と「野外彫刻の修復、保全対策委員会」の設置を強く要望した。

「環境報告書展」に参加

ポスターで活動PR

札幌市が環境事業活動に取り組んでいる事業・団体などから活動状況報告を募集した「環境報告書展」が3月1日から5日までの期間中、札幌駅前通地下歩行空間（チカホ）で開かれ、友の会も彫刻清掃活動などを知らせるポスターなどを展示して日ごろの取り組みをPRした。



展示したポスターはB2サイズ（515×728ミリ）2枚で、「木下成太郎像」（中島公園）の清掃作業と円山動物園の《よいこ

つよいこ》の修復過程を写真で紹介した。

事務局日誌 ▼2018年12月＝北方ジャーナル12月号「zoom up」欄に橋本会長インタビュー掲載 ▼13日＝定例役員会(エルプラザ)新年会打ち合わせ、▼28日＝会報66号発送 ▼2019年1月10日＝定例役員会(エルプラザ)新年会準備、会報67号編集企画 ▼16日＝彫刻100選選定会議 ▼26日＝2019年新年会(奥井ギャラリー)参加者30人、トランペット演奏会など ▼2月8－10日＝「ゆきあかり in 中島公園」に参加協力 ▼14日＝定例役員会(エルプラザ)2019年度総会準備ほか ▼3月1－5日＝札幌市「環境報告書展」出展(地下歩行空間)

編集後記 ▼今号(67号)は「特集 本田明二生誕100年」とした。近藤泉さんからご尊父の思い出、また、「風見鶏」も本田明二がらみで書いていただき、渡会さん、平岩さんにも思い出を寄せていただいた ▼本田明二さんは旧制札幌二中(現札幌西高)の21期卒業生。同期に濱和さんの名を見つけた。濱さんは友の会の大先輩浜久子さんの御夫君。久子さんは小生の恩師。小生は西高卒。不思議な巡り合わせを発見した。(大内)

札幌彫刻美術館友の会
会報「いずみ」 No.67
2019年4月1日発行
発行人 橋本 信夫
編集者 大内 和
(札幌市清田区清田5-4-6-30
011-884-6025)
印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」67号 目次

自作自選37 《SPRING Wind II》	伊藤隆弘	表紙
作者の言葉		2
宮の森の四季37「虹と雪のばらード」	大場裕子	2
風見鶏「北海道の美術家と冬」	吉崎元章	3
寄稿「もうひとつの『終のすみか』」	近藤 泉	4
寄稿「彫刻家・本田明二」	渡会純价、平岩博幸	5
友の会ニュース		6-7
2019年友の会新年会／2019年度総会予告／ゆきあかり in 中島公園／井尻哲男「アフリカンアート展」／文化部と懇談／環境報告書展参加		
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか		8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本 館

■企画展

砂澤ビッキ展 一樹一

4月27日[土]～6月30日[日]

従来、工芸的と捉えられることが多く、あまり光が当てられてこなかった作品群を紹介。芸術の森美術館で開催する「砂澤ビッキ～風～」との同時開催。市民交流プラザで関連事業を行う。

記念館

■所蔵品展

常設展 「本郷新の歩みと芸術」

普及事業など

■(通年) ハロー! ミュージアム(彫刻美術館コース)

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です! ご覧ください

<http://sapporo-chokoku.jp>